

## 風を起こす &lt;第17回&gt;

子どもを守る最後の砦として、  
困難を引き受け、立ち向かう

熊本市児童相談所所長

梶井 悟さん

今年4月、全国20番目の政令指定都市として誕生する熊本市。移行にともなって拡充される業務の一つに児童相談所の設置がある。高度な専門性が求められる児童相談所の所長を、市では公募という形で採用した。

## 新設の児童相談所所長を公募で採用

幼い命が犠牲となる事件が跡を絶たない。この数カ月だけでも、実父が殴って生後2カ月の長女が死亡、母の交際相手が4歳の長男を暴行し死亡、実母が泣き止まない息子の首を絞めて死亡、と児童虐待による死亡事件が何件も発生している。

死亡にいたらずとも骨折、重体、失明と児童に関わるいたましい事件は全国各地で起きている。平成22年度、全国の児童相談所に寄せられた児童虐待に関する相談件数を見ても、5万5154件で過去最多と

なっている。

増加する児童虐待や非行・不登校など、子どもに関するさまざまな問題に対処するのが児童相談所。子ども家庭福祉の第一線機関として、都道府県と政令指定都市に義務設置されている。

熊本市では政令指定都市への移行に先立ち、平成22年4月に児童相談所を開設した。そこには、子どもと保護者からの相談を受け付ける「教育相談室」、虐待を受けるなどした子どもが身を寄せる「一時保護所」に加え、今年4月からは身体と知的障害者の相談・指導を行う「障害者更生相談所」も設けられる。



[かじい さとる]

1949年、岐阜県出身。静岡大学人文学部哲学科卒業後、岐阜県入庁。福祉専門職として児童自立支援施設をはじめ児童相談所、福祉事務所に勤務。岐阜県中央子ども相談センター所長を最後に2009年3月退職。2010年4月より現職。趣味は登山で、日本百名山は半数踏破している。養護施設の職員だった妻との間に1男2女がいる。



日本三名城の一つ「熊本城」は市の中心部に鎮座する。活気あふれる繁華街と雄大にそびえ立つ熊本城の対比は、梶井さんお気に入りの風景

「毎日いろんな相談が寄せられますよ。子どもが包丁を持ち出し親に向かってきたとか、子どもが今にも自殺しそうだとか、赤ちゃんがくも膜下出血で入院したとか。近所の方からの虐待通報も結構あります」

熊本県は18歳未満に占める乳児院・児童養護施設の子どもの割合が、全国で2番目に高い。児童相談所では、一刻を争う相談が寄せられる度に緊急会議を開き、方針を決めていく。そのトップが公募で採用された所長の梶井悟さん。岐阜県の福祉系職員として36年のキャリアと実績をもつ。

## 子どもたちの真の要求を引き出したい

梶井さんは岐阜県職員として10回の転勤を経験したが、そのうち児童自立支援施設には3回赴任した。

児童自立支援施設はかつて「感化院」や「教護院」と呼ばれた施設で、入ってくる子どもたちはいわゆる非行児童。児童相談所の措置によって入ってくる子どもがほとんどだが、家庭裁判所で審判を受け、保護処分として送られてくる子どももいる。矯正教育を目的とする少年院とは異なり、児童福祉法上の支援を行う施設として位置づけられている。さまざまな理由で非行に走った子どもたちと生活を共にしながら、社会に適應するよう支援していくのが児童自立支援施設に求められる役割だ。

梶井さんは入庁してすぐ児童自立支援施設に配属された。真新しいスーツで施設の門をくぐった先に待っていたのは、仰天の日々だった。

「施設を抜け出して無断外泊するわ、盗んだ車を無免許運転でぶつけて壊すわ、タバコの火の不始末で使所が火事になるわ：本当に次から次にいろんなことをしでかしてくれました」

社会の常識が通じない相手に、どうやって人の道を教えていけばいいのか。しかも相手は有り余る体力を全力でぶつけてくる。普通の神経ならすぐに参ってしまうだろう。

ノイローゼになった職員がいたと聞いても不思議ではない。それでも、梶井さんは2年目あたりから子どもたちの親分的存在となり、良好な関係を築いていった。

「子どもたちとぶつかる中で、少しずつ彼らを理解できるようになったのです。ここにいる子どもたちはずっと、命ぎりぎり生きてきたのだと」

児童自立支援施設で自らの適性を確信した梶井さんだったが、2度目に配属されたときはギブアップ寸前になった。ドラマ『スクールウォーズ』が話題を呼び、校内暴力が社会現象化していた時代だった。

子どもたちは集団で、職員に対し暴言の限り反抗の限りを尽くして向かってくる。子どもに投げつけられた金槌が目の前をかすめたこともあった。内からの攻撃に加えて、外からの攻撃もあった。毎週末のように有職少年たちが深夜、襲撃に来るのだ。

職員たちは追い込まれていた。「この状況を打開するには、普通の勤務表など守ってられない」梶井さんは着替えを詰めた鞆を手に、職員たちに「今日から泊まり込むぞ！」と宣言した。泊まり込み態勢となると勤務時間は長くなるが、精神的には楽になる。腰を落ち着けて子どもたちと向き合うことができるからだ。職員同士の絆が深まり、子どもたちに強いメッセージを発信することもできた。

格闘の日々に頭を悩ませていた梶井さんの前に、心強い助っ人が現れた。それは最



政令市誕生と同時に開設される「こどもセンター」。この中に熊本市児童相談所も入る

初に赴任したときの退院生だった。

「彼は体が大きくスポーツ万能で、その上とても賢い人間でした。私の危機を敏感に感じ取って、仕事が休みの日、頻繁に施設に足を運んで、子どもたちの中に積極的に入ってくれました」

反抗や暴力に屈しない梶井さんは、子どもたちから敵視されることもあった。

「それでも子どもたちに体を張って立ち向かったのは、表面からは見えなくなっている子どもたちの真の要求を引き出したかったからです」

職員たちのチームワークと真の愛情により、攻撃的だった子どもたちはすっかり穏やかになり、まじめに日課をこなすようになった。

「そうなってみると、普通の子どもより遙かに何でもよくする、外に誇れる子どもたちになっていました。命の縮む思いをしても、私は基本的に非行児童が好きでしたし、彼らと関わるのが楽しかったのです」

## 逆境に負け、くじけた人たちの 関わりを通して得たもの

梶井さんは児童自立支援施設以外にも福祉事務所や県庁健康増進課に配属された。最も長かったのは児童相談所。所長も含め4回配属され、トータル15年間、児童相談業務に取り組んだ。

児童相談所では児童虐待への関心の高まりを背景に、虐待防止のためさまざまな普

及啓発活動を実践した。病院、医師会、民生委員の会合などに積極的に出向き、活動への理解と協力も求めた。

「以前なら、親の子育て相談に乗って感謝されるというのが普通でした。しかし、児童虐待相談を積極的にうけるようになって以降、児童相談所の仕事は大きく変わりました。児童虐待では相談したくない親に無理矢理相談させるわけですから、どうしてもめぐる。そこが違います」

福祉事務所では生活保護業務を担当し、再び、命の縮む思いも経験した。

「いくつもの福祉の現場で私が接してきたのは、多くが逆境に負け、くじけた人たちでした。そうした人たちの関わりを通して、人を受容する幅を広げていくことが、私にとって福祉の仕事でした」

人間同士のぶつかりあいの中で、マニュアルにはない技術を培い、人間性を深めてきた梶井さんには、とりわけ忘れられない出来事がある。

それは、最初に赴任した児童自立支援施設で野球監督になったときのこと。施設対抗野球試合で「全国大会に行く！」という子どもたちの意気込みは強く、梶井さんもその気持ちに懸けていた。だから、雨だろうが炎天下だろうが毎日練習に明け暮れた。

全国大会に出場するには、東海大会で2勝しなければならぬ。1回戦敗退した翌年、見事1勝を上げたときには選手も職員も手を取り合って喜んだ。ピッチャーの少年は1

勝を上げたことで、まるで別人のように自信に満ちた表情が変わった。この試合に勝てば全国大会に行ける。——チームの気持が一つになり、次々とファイナルプレーを見せた。「健闘もむなしく、強豪を相手に敗れてしまいました。初めて1勝を上げたときの感動は今でも忘れられません。子どもも職員も一緒に喜んでくれたことを、昨日のことのように思い出します」

## もう一度、自分らしく生きたい

梶井さんは59歳で勸奨退職した後、岐阜県の嘱託職員として週4日で勤務していた。仕事は児童相談所の電話相談や虐待防止活動のサポート。現役時代はあれほど待ちわびた、肩の荷が下りた生活。だったが、実際に過ごしてみると「こんな中途半端な生活があと何年続くのだろうか」と暗澹たる心境に陥った。

そんな雰囲気を感じたのだろう。ある日同僚が情報をくれた。「熊本市で児童相談所の所長を公募しているよ」。応募条件は所長経験3年以上。情報源は市のホームページに掲載されていた。お知らせだった。「わざわざ岐阜から熊本に引っ越してまでとはじめは全く乗り気じゃなかったのですが、段々その気になってやってみようかと。もう一度、自分らしく生きたい。——それが新たな挑戦への原動力になりました」

新婚旅行以来の熊本で、梶井さんは新し



退職後、家族で訪れた屋久島で妻と記念撮影。  
仕事で悩んだとき、妻からの市民目線のアド  
バイスに大いに救われた。「言葉には出しませ  
んが、妻にはとても感謝しています」

いスタートを切った。熊本市児童相談所で  
は熊本県から引き継いだ虐待、非行、不登  
校など1100件の相談に加え、知的障害  
の程度を見極める療育手帳の判定、里親の  
登録・委託など子どもにまつわるあらゆる  
問題に対応する。

さらに、熊本市では、この通りのゆり  
かごにも対処しなければならぬ。この  
通りのゆりかごとは親が育てられない子  
どもを匿名で受け入れるシステムで、市内  
にある慈恵病院が熊本市に設置申請し、平  
成19年から運用している。

この仕組みは、外部から赤ちゃんが入れ  
られるとブザーが鳴り、病院の職員が駆けつ  
ける。職員はまだ近くにいるはずの親を探す  
とともに、医師が赤ちゃんの健康状態を確  
認し、児童相談所や警察にも通報する。児  
童相談所では可能な限り親を探し出して自  
分で育てるよう説得するが、それが叶わな  
いときは乳児院に移すなど適切な処置をする。  
この通りのゆりかごは世間からの注  
目度が高い分、児童相談所ではマスコミの

取材を受けることになる。議会対応や委員  
会での説明など、梶井さんにとっては初体験  
の仕事が多い上、仕事量も岐阜時代に比べ  
数倍増えた。よそ者ゆえに気を遣うところも  
あれば、根本的な理念のように引けないとこ  
ろもあるが、梶井さんはこの土地のやり方を  
尊重しながらも、理念は貫こうとしている。  
「大変な面はあっても、熊本に来たことで  
福祉の仕事の普遍性を確認できましたし、  
何よりも自分がこれまでやってきたことを肯  
定された気がしました」

### 困難を乗り越えた者だけに見える景色

熊本市児童相談所は配置義務のある児童  
福祉司をはじめ児童心理司、相談員など約  
60名の組織となり、政令市移行後はさらに  
10名以上が加わる予定だ。

虐待事件が起きると、児童相談所は真っ  
先に非難にさらされる。児童虐待死を管内  
で出さないのはもちろんだが、隠れたところ  
で虐待環境に置かれている子どもを見つけ  
出し、救っていくことも期待される。

「子どもの命と人権を守る最後の砦となれ  
るよう、児童相談所には職権一時保護や立  
ち入り調査などの法的権限が与えられてい  
ます。とは言っても、親から子どもを奪う  
わけですから大変ですよ。虐待している親  
ほど肉親の情が強かったりしますから。親  
へのきちんとした対応も必要です」

急増する児童虐待に対し、学校や保健福

祉センターとも連携してネットワークをつく  
る。その核となつているのが児童相談所だ。

「私たちは、関係した子どもたち一人一人  
に対して方向性を示さなければなりません。  
いわば羅針盤のような存在です。ですから、  
どんなに難しいケースであろうとも、最も  
困難な部分はうちが引き受ける」という強  
い気持ちで取り組んでいます」

目指すのは地域に親しまれ、信頼される  
児童相談所。大所帯となった組織をまとめ  
るため、所長としての方針はミーティング  
や書面で職員全員にしっかりと伝える。児童  
相談所の運営にチームワークは欠かせない。  
「幸い、うちの職員はチームワークもよく、  
昼夜問わず、献身的に業務を遂行してくれ  
ています」と梶井さんは胸を張る。

大学卒業後、福祉系職員という職業を選  
んだのは特に高い志があったからではない。  
だが、児童自立支援施設での経験が梶井さ  
んを大きく変えた。

「忍耐が求められる険しい道を歩んだこと  
で、人間の本质に迫る、深く豊かな経験を  
積むことができました」

梶井さんの信条は「困難があるから、生  
きがいがある」。所長の任期まであと1年、  
その後の予定を尋ねると「すべてを空っぽ  
にしたいですね。そこからまた、何が出て  
くるか見てみたい」と目を輝かせる。その  
先にもきつと、困難を乗り越えた者だけに  
見える景色が広がっていることだろう。

(協会職員／篠田良子)